

聖書：エペソ人への手紙6章18～24節

説教：祈りなさい

はじめに

前回のおさらいをします。パウロはこう言っていました。この世は悪魔の策略が満ちている。素手で戦おうとしても相手は強い。人の力で勝つことはできない。主イエス・キリストを信じる者には、神の武具が与えられるからそれを身につけなさい。そしてまた神の大能の力で私たちに覆ってくださっている。それが前回のあらすじでした。

神の武具を身につけ、大能の力にも覆われている私たちは、具体的にどのようにしてこの罪に満ちた世界を歩いていくのか。ただ座っているのではない。具体的に行動していく。それが祈りである。そういう流れになっています。そもそも祈りとはどのようなことなのか。今日は祈りについて考えてまいります。

1 祈り

1) あらゆる願い

18節。「あらゆる祈りと願いによって、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのために、目を覚ましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くして祈りなさい。」ここには祈りについて三つの要素が挙げられています。一つ目は、「あらゆる祈りと願いで祈る」です。「なんでもよい」です。そういうと質問がきそうです。「祈ってはいけない祈りもあるのではないか。」

皆さんは、祈りを自動販売機のようなものだと考えたことはなかったでしょうか。コインを入れるように祈ると、ご褒美のように祈ったことがかなえられる。そんなイメージです。自動販売機でものを買うときは、お金しか入れてはいけない。それと同じように、よい祈りはOKで、悪い祈りはだめ。このことはまた後で詳しく取り上げます。

2) どんなときにも

祈りの要素の二つ目が「どんなときにも」です。祈りやすいときは簡単ですからそれはよい。でも、いつもそうとは限らない。あまりにも問題が大きくて途方に暮れるときがあります。からだが極端に疲れたとき、心がどんと沈んでしまったとき、病気で弱っているとき、そんなときとても祈れない。私が関わっていたプロジェクトで大きなトラブルが続いたことがありました。対策しなければということと東京に出張すると、関係者から

「どうするのだ」と迫られました。やっと会議が終わって、泊まっているホテルに帰ろうとして駅のホームで電車を待っていたときのことです。ふと、電車に飛び込むという考えが頭に浮かんできました。そんなことを考える自分にびっくりして、これはまずいと思い、すぐに妻に電話をして祈って欲しいと要請したことがありました。とても自分で祈れないのです。そんなときは、ほかの人をお願いして祈ってもらう。そうやって、「どんなときにも」祈る。祈りを絶えさせない。教会はそういうところだと思うのです。

3) 忍耐の限りを尽くして

祈りの要素の三つ目が「忍耐の限りを尽くして」です。最近、中学校の先生とお話しをする機会があったのですが、今の子どもたちは、以前に比べると自分で考えることが苦手になって来たと嘆いていました。困ったことがあっても、自分で問題を解決しようとしません。ただ、先生の指示を待っている。おそらく、小さいときから周りの大人がすべてお膳立てして上げて、困ったことが起きないように育てられてきたからだろうと言っていました。これも悪魔の策略かわかりませんが、とにかく忍耐するのが苦手になってしまった。そういう時代に、あえて「忍耐の限りを尽くして」と言うのです。

今祈りの要素を三つ挙げましたが、ここで整理します。二つのことが疑問として出てきました。一つ目は、「あらゆる願い」と言ってるけれど、祈ってはいけないことがあるはずだ。二つ目。忍耐ができない時代にどうして忍耐の限りを尽くして、と言うのか。

2 祈りは変えられていく

1) 負い目のある人たちを赦していないのに祈る？

そこでまず一つ目の疑問、祈ってはいけない祈りがあるのか。先ほど皆さんと一緒に主の祈りを祈りました。そのなかに「私たちも私たちも負い目のある人たちと赦します」とあります。みなさんは本当に赦したのですか。まだ赦せない人だっているのではないか。赦すことのできない人がいるのならば、「私たちも私たちも負い目のある人たちと赦します」と祈ることはできない。これこそ、

祈ってはいけないことになる。正直な方は、こ
だけ声が小さくなるとか、そこだけ祈れないとい
う人もいる。しかし、イエスが主の祈りを教えてく
ださったとき、「祈るときは、こう言いなさい」
とだけ言って、ほかに一切条件をつけなかったの
です。つまり、たとえあなたがいまあの人を赦して
いなくても、祈りなさいと言うのです。祈りを自動
販売機のようなものだと考える限り、答えは出て
こないでしょう。ではどういうことか。

2) ハンナの祈り (I サム 1 章 11 節)

そこで聖書からひとつの例を取り上げます。サム
エル記第一 1 章に、ハンナという不妊で苦しんで
いたひとりの女性が登場します。夫のエルカナに
は、もう一人の妻であるペニンナがいて、こちらは
ふつうに子を産んでいく。そうするとよくありが
ちなことですが、ペニンナはハンナをいじめ。あ
るとき、とうとうハンナはペニンナのいじめに耐
えかねて、食事の席から立ち上がり、宮に行って激
しく泣きながら主に祈り始めます。「万軍の主よ。
もし、あなたがはしための苦しみをご覧になり、
私を心に留め、このはしためを忘れず、男の子を下
さるなら、私はその子を一生の間、主にお渡しし
ます。」

ハンナが、ずっと以前からこう思っていたわけ
ではありません。あまりのつらさのなかで祈り始め
たら、自分でも思ってもいなかったことが口から
出てきた。そういう祈りです。ところが、実は、こ
れこそ主のみこころにかなった祈りだった。こうし
て生まれたのがサムエルで、彼は祭司となり、イ
スラエルのために重要な働きをしていくわけです。

ここから二つのことがわかります。一つ目。何を
祈ればよいのか、私たちが最初から決めなくてよ
い。神が祈りのうちに働き、祈りを変えてくださ
る、祈るべきことばを神が教えてくださる。ハン
ナは最初、私をいじめるペニンナを遠ざけてくだ
さいと祈っていたと思うのです。ところが神が祈り
を変えてくださって、気がついたらみこころにかな
う祈りになっていく。ですから、「あらゆる祈り
と願い」で祈ってよい。これが一つ目。

そして二つ目。忍耐するのが苦手な時代に、忍
耐の限りを尽くして祈りなさいと言われるのはな
ぜか。そんなに難しい話しではない。忍耐したく
ないと言っても、忍耐しなければならぬときが
やってきます。ハンナも不妊という苦しみの道を通
ることになりました。もちろん子どもを与えてくだ
さいと祈ったでしょう。ぜもなぜか道が開かれず、
忍耐していった。そしてあるとき、もう我慢できな

いという思いで追いつめられたとき、神のみこ
ころにかなった祈りをしていった。

祈りがなかなかかなえられないということがあ
ります。神は私の祈りを聞いてくださらないと不平
をいいたくなるときがあります。けれども、あえて
祈りがかなえられないことを通して、神は忍耐する
ことを教えてくださっているのかもしれません。祈
りがかなえられないこともみこころだということ
です。私たちがりぎりのところで忍耐していくと
き、神は私たちの深みに働いてくださる。そうして
私たちをみこころにかなうようにと造り変えてい
く。神はこのように私たちに関わってくださるの
です。

3 平安、愛、恵み

1) 主イエス・キリストを愛する

手紙の最後に移ります。23, 24 節。「信仰に伴
う、平安と愛が、父なる神と主イエス・キリスト
から、兄弟たちにありますように。朽ちることの
ない愛をもって私たちの主イエス・キリストを愛す
る、すべての人とともに、恵みがありますよう
に。」

平安、愛、恵みが、主イエス・キリストを信じ
て愛する人たちに与えられる。これもまことに結
構で素晴らしい。ところで問題は、主イエス・キ
リストを本当に愛するとはどういうことなのか。
「主イエスを愛します」と口で言うことは簡単で
す。でもよく考えてみると、愛するとはどういうこ
とか、ほんとうに理解していたのかどうか。親が
子どもを愛する、と言います。夫が妻を愛する、と
言います。愛ということばをそんな意味だと思って
使っています。でも、実際はどうですか。親は子ど
もを愛すると言いながら、親のエゴを子どもに押
しつけて、子どもが苦しむことがあります。夫は妻
を愛すると口で言いながら、妻を裏切って悲しま
せることがある。世間で使っている愛というの
は、まことに自己中心的で勝手に頼りない。そん
な意味になっている。

2) 主イエス・キリストの愛を模範として

ですから、本当の愛とはどんな意味なのかを改
めて教えてもらわなければわからない。誰から教え
てもらうか。主イエス・キリストです。この方が十
字架において示してくださいました。私たちが、神
に立ち返らず、神を裏切っていたときに、神は愛を
示してくださいました。その模範から教えていただきま
す。その模範を学びながら、私たちが神を愛してい
きます。

主の祈りこそ、神の愛を学ぶ学校だと言ってよい
かもしれません。主の祈りを祈りながら、私はま
だ負い目のある人たちを赦せないと、改めて傷口
に触れられるようで痛みを感じます。しかし、主は
祈りのなかに働きかけ、時間をかけながら私たち
を造り変え、ご自身のみそばに引き寄せてくださ
います。祈りを通して神の愛を学んでいく、教えら
れていきます。

この方とともに、歩んでまいります。